

もし今、あなたがこの記事を、朝の通勤電車の中や昼休みの職場で読もうとしているのだとしたら、ちょっと待っていただきたい。いくぶん、「夜向き」のお話なので……。

朝駆け!?! 年少「徳島市長」と の奇妙な関係 特集

というわけで、のっけから何ではあるが、究極のエロスは何か。一説によるとそれは「タブーの侵犯」だという。禁じられた遊びほど熱く燃え盛るもの。互いの立場を顧みないロマンスもまた、禁を破る快感はこの上ないに違いない。「ふたり」の関係について聞かせてください。本誌記者がそう問いかけても、その女性には終始無言を貫くばかりだった。まるで自身が「禁忌」を犯してしまった現実から目を背けるように――。

少(2020年4月6日付朝日新聞)
徳島市長に36歳内藤氏 女性で史上最年少(同日付読売新聞)
昨年、徳島市は全国に誇る阿波踊り以外で久しぶりに「全国ニュース」を提供した。政治家の若返り、また多様な人材の登用が求められる令和の時代において、女性としては史上最年少となる市長が誕生したのだ。内藤和子市長。

クシーではなく、自分で家用車を運転して登庁することがあるのは何故なのかと、議会で質問されたのだ。これに対して内藤市長は、「コロナ禍の状況にも鑑み、必要最小限の範囲で家用車を使用する場合がございませう」と、答弁したのだが……。徳島市政関係者が声を潜める。

自宅ではない。そして、「そのマンションへの内藤さんの出入りは月10回程度に及ぶこともあり、昼夜を問わず、彼女の家用車がマンションの前に停まっています。つい先月(3月)もです」(同)
一体、内藤市長が足繁く通うマンションには何が待っていたのか。市政事情通が耳打ちする。「内藤市長は、そのマンションに住む徳島新聞の男性記者のもとに足を運んでいったんです。彼女と同世代のその記者は、昨年の市長選に内藤さんが出馬の意向を表明した際、彼女の担当記者として活躍していました。そうした縁もあり、仲睦まじく、なつたようです」

異例の「逆夜回り」逆 女性で全国歴代最 「地元紙記者」

「ドライブ好き」の内藤市長(上は記者のマンションを出る市長)



前代未聞、市長による記者宅訪問という「逆朝駆け」「逆夜回り」!?
内藤市長には離婚歴があり、小学生の子どもがいるが現在は独身。当然、彼女がどの男性と親しく、なるのも自由である。だが、

「味方になってくれ」

男性の「取材記者」と「取材対象者」である女性市長が、記者の自宅で逢瀬を繰り返す。深い仲であることに、ついエロスの匂いを感じ取ってしまうのは「嗅覚過敏」なのだろうか。そうなのかもしれない。

市長も出馬していた。にも拘らず、徳島新聞のその男性記者は内藤氏に「肩入れ」していたというのだ。もし、この男性記者のスタンスが内藤市長との、深い仲に由来するものだとしたら、ふたりの脳裏に「記者倫理」あるいは「公私混同」の文字は過ぎらなかつたのだろうか……。男性記者と女性市長。両者の立場ゆえの「危険な関係」には、お節介と承知しつつ、気を揉んでしまうのである。

ただ、さすが。なお、弊社は、記者モラルの観点から、選挙担当記者が特定候補者を応援することを厳に慎みます。件の男性記者が、勇猛果敢にも自宅内で内藤市長に「深く食い込む取材」を繰り返していたとしたら、それを「個人的な件」と言い切れるか微妙なところのような気がするが……。いずれにせよその判定は、県内随一の取材力を誇る徳島新聞自身による今後の検証に委ねるしかあるまい。その徳島新聞は、内藤市長の誕生を受け社説にこう記している。

「その男性記者は、『私が内藤さん付き記者になりました』と説明した上で、『今度の市長選は絶対に内藤さんが勝つ。そばに付いている私が一番分かる』『内藤さんには大物がバックに付いている』『内藤さんの味方になってくれ』と、持ち掛けてきたんです」(同)

一方の男性記者は「事実無根です」と言うばかりなので徳島新聞に見解を訊くと、こう回答した。「職員の個人的な件に関するコメントは控えさせていただきます」

市政刷新にあたり聖域は許されない。内藤市長に期待されるタブーなき改革。努々、タブーなき快感とお間違えなきように。